

老球の細道239

バスケットボールは高い人格を形成する

会津バスケットボール協会 室井 富仁

アメリカのノースカロライナ大学は世界で最高のバスケットボール選手を何人か輩出してきた。マイケル・ジョーダン、ビンス・カーター、ジェリー・スタックハウス、アントワン・ジェイミソンは全員偉大なNBAプレーヤーであった。そして、彼らは全員大学を中退してNBAに入団した(アーリー・エントリー)。しかし、彼らはその後、全員が勉強を続け、卒業論文を書き学位を得て卒業している。億万長者達は、富と名声を手にしても勉強は続けていた。このような高い人格はバスケットボールで培われたのだろうか。

バスケットボールの創始者ジェームス・ネイスミス博士は自著『バスケットボールその起源と発展』(1941年)の中で「バスケットボールの主な目的は、レクリエーション(気晴らし、気分転換)とバスケットボールから得られる身体的、精神的特性の発達である」と述べている。また、「正しく指導されたバスケットボールのゲームは“精神的特性(人格)を発達させる実験室”である」とも。

ネイスミス博士が述べている人格に影響を与える精神的特性とは下記とおり。

(1) 独創力: 新しい状況に効果的に対処できる能力。バスケットボールでは瞬時に判断して、その時その時の状況に応じて動かなくてはならない。プレーヤーは、まったく新しい状況に出会った時、いちいちコーチに頼ってはられない。その状況に、自分自身のみで直面しなければならない。

(2) 注意力: 刺激に対して、すばやく反応できる能力。注意力を直ちに、また、それがいついかなるときでも反応させなければならない。ボールは速いスピードで動くし、またボール保持者も瞬時に変わるので、常に反応できるように心がけていなければならない。

(3) 協調性: チームの仲間と共にまず努力すること。バスケットボールほど協力を要する競技は他にない。1チームはわずか5人である。1人でも協力を怠るようなことがあればチームは崩壊するだろう。

(4) 自信: 何かを行うとき、自分にはその能力があるのだという自覚。どんなプレーヤーでも必要に迫られたときには、自力でゲームを続けていくことができなければならない。味方に頼ることができない場合が到来したときに、自信をもっていれば、その難局に独力で対処して、それを切り抜けていくことができると感ずるにちがいない。

(5) 自己犠牲: ひとりの個人的な野心よりも、チームの利益をすすんで大事にする気持ちをもてること。バスケットボールにおける単位は、個々のプレーヤーというよりむしろチームである。バスケットボールにはエゴイスト(利己主義者)が入る余地はない。

(6) 自制心: ある目的のために、自分の気持ちを従わせること。反省せざるをえないようなとき、反省もしないで、そのまますまそうとするようなプレーヤーはチームにとって厄介者である。チームの結びつきを著しく低下させてしまう。チームにはならない。

(7) スポーツマンシップ: 他の選手の権利を自分自身の権利とともに、強く遵守していくこと。活発にプレーし、定められたルールに従い、潔く負け、礼儀正しく勝つ。賛辞ばかりでなく批判にも素直に耳を傾ける。そして、常にチームメイトや相手チームのプレーヤーの態度、心構えを尊重する。